

(18)コンパクトシティー・金沢市の試み

最近、金沢市を訪れる機会があった。金沢は昭和 38 年のいわゆる「38 豪雪」の時も、交通機関の混乱はそれほど起きなかったといわれ、「コンパクトシティー」の利点を感じさせる都市である。今回は、現代都市の大問題である「交通が与える環境負荷」という点において、金沢が何かヒントを与えてくれるのではないかという期待をもった訪問でもあった。

金沢市では、金沢城跡に金沢大学があったところと比較すると、中心市街地に若者が集まらず、文化の創造という点で活力が失われているという声が上がっている。実際、多くの大学が郊外の環状道路沿いに立地・移転し、また、県庁が金沢駅近くの再開発地域に移転したため、一方ではこうした跡地に 21 世紀美術館や近代的なお城等が作られ、多数の市民や観光客を集めているという効果をもたらしたものの、かつての学園都市の趣はなくなっているというのが現状である。

そこで、金沢市は学生を市内に呼び込むために、いくつかの工夫を行なっている。平成 14 年には、「学生と共生するまちづくり検討会」が作られ、学生の文化拠点として、香林坊シネマストリート沿いの旧プラザ劇場を活用した「香林坊ハーバー」が作られ、香林坊カフェもオープンした。しかし平成 17 年には、旧プラザ劇場が取り壊しになり、旧イーストサロン(デジタルアートの育成・展示を行なっている)への移転を余儀なくされたし、また各種イベントに集まる若者の数も増えていないという。この原因の多くは、郊外から中心地に来る学生の交通問題にあるという。

これに対処するため、金沢市としても、県庁跡地でシティーカレッジを開催したり、夜間、学生が大学に戻れるようにタクシーのチケットを配布するなど、涙ぐましい努力を行なっている。さらに最近では、中心地と郊外の大学を結ぶバス路線を維持するために、学生のバス利用の目標値を設定する「金沢バスターガー方式」という制度をつくり、バス路線を確保し、都心回帰につなげようという工夫も行なっている。

徒歩と公共交通機関を主な交通手段とするコンパクトシティーは、市民・学生の日常生活の利便性(アクセシビリティ)を高め、エネルギー消費の面でも、郊外に拡散した現代のまちに比較して効率的で、環境保全に貢献していたのである。また、「学都」は多彩な文化活動によって、中心市街地に活力と賑わいをもたらしていたのであり、今日の市内中心地への学生呼び寄せは、こうしたコンパクトシティーのメリットを再確認するものといえよう。金沢市での試みが成功し、他地域への波及効果が生まれることを期待している。

以上